

第二の人生 森へようこそ

高槻、シニアに林業講習

サラリーマンを定年退職後、山林や林業について学び、間伐や枝打ち作業に励む。大阪府高槻市がそんな人たちを「市民林業士」と名付け、養成に力を入れている。高齢世代の健康づくりにつなげる一方、放置林対策にも一役買ってもらう狙いだ。

放置林整備に一役

平日の午前。同市北部の「フォーム高槻」（同市原）ヒノキ林や竹林で、作業着姿の男女40人が4グループに分かれ汗を流していた。多くは60〜70代。のこぎりやロープを使い、次々と間伐や枝打ち作業をこなす。NPO法人「森のプラット

フォーム高槻」（同市原）のメンバーたちだ。同法人は山林の持ち主から依頼を受け、週1日約6時間、間伐や枝打ちのボランティアをする。3年前から参加する同市栄町2丁目

の森本俊行さん（68）は元家

電の販売員。山林とのかかわりはほとんどなかったが、「退職後に暇を持って余すぐらいならと始めた。山歩きをする人たちにもきれいな山が見せられる」。

市は毎年、林業に関する講習を開催し「市民林業士」を育成。講習を受けた

人のみが同法人に加入できる仕組みだ。講習は月2回のペースで計約60時間。間伐すべき木の見分け方や、木を切る手順を教える内容で、2004年度以降、186人が修了した。

背景に、放置林対策が思うように進まない現状がある。放置林は高度経済成長

は50センチまで減少した。同法人による間伐実績はこれまで計10センチだが、メンバーは間伐材を用いたベンチ製造や、市民向けのワークショップも開催。市は、こうした活動が市民に放置林の現状を伝え、間伐材の利用にも目を向けさせると期待している。今年度も7〜12月に市民林業士の講習を開いている。

期に植林されたものの、その後の木材価格低下で伐採が中止され、間伐などの手入れがされていない。木々が過密になり植物が育たなくなる。山は雨水を蓄えられず、河川の増水や土砂崩れを招く恐れがある。人口約36万人の同市は地域の半分が山林。山と市街地が近接し、放置林対策は防災上、大きな意味をもつ。市と地元森林組合によると、定期的な手入れが必要な人工林は2426ヘクタール。毎年約240ヘクタール間伐するのが望ましいとされるが、市内の間伐実績は年間100〜140ヘクタール。昨年度は50センチまで減少した。同法人による間伐実績はこれまで計10センチだが、メンバーは間伐材を用いたベンチ製造や、市民向けのワークショップも開催。市は、こうした活動が市民に放置林の現状を伝え、間伐材の利用にも目を向けさせると期待している。今年度も7〜12月に市民林業士の講習を開いている。

（采沢嘉高）



山林の間伐作業にあたるNPO法人「森のプラットフォーム高槻」のメンバーたち。高槻市原

市民養成 他の自治体も

市民による山林整備を後押ししようという取り組みは、他の自治体でも広がっている。

大阪府茨木市は2005年度から「森林サポート養成講座」を開催。高槻市と同様、7〜12月に月2回のペースで伐採方法や救命救急を教えている。年間15人ほどが参加している。

兵庫県は、県内のNPO法人に委託して講座を開催。5日間かけて作業の基礎を学べるコースのほか、仲間の安全にまで配慮できる上級者養成コースも昨年度から始めた。奈良県も年2〜3回、ボランティアの安全確保を目的とした研修を実施している。